

た。

香春岳をはなれ北側へ約2kmの後入道までの遊動は、6・7月のビワの時期に特徴的にみられていたが、本年の調査では観察されなかった。さらに、これまでは秋に香春岳内の自然林の多い山麓を主に利用していたが、本年度は山麓部をさける傾向がみられ、これまで利用のあまりなかった二ノ岳・三ノ岳の鞍部の利用が観察された。冬期には、一定の泊り場を集中して利用し、移動距離は他の季節に比べ短くなる傾向にあったが、1975年1月ではそれが一層顕著になり、オモノキ谷に多くみられるクスの実を主食とし、泊り場としても集中して利用した。1日当たり平均移動距離は680mと1972年、1973年の平均移動距離1,180mをかなり下まわっている。現在継続中の調査でもこの様な土地の集中利用はみられており、個体数の減少により行動域の利用がこれまでになく別の方法でおこなわれている可能性がある。

高知県におけるニホンザル個体群の分布

古屋 義男(高知女子大・家政)

昭和48年のききこみ調査によって得た資料にもとづき、今年度は高知県内7カ所のニホンザル生息地を調査した。結果はきわめて不十分であったが、以下にその概要を記す。

1. 野根山・小坂山(安芸郡東洋町)

小坂山から野根山にかけてのかなり広い範囲(7×3kmくらい)に20~30頭の群れがいる。地元では、数群いるといていたが1ないし2群と思われる。林は造林地と一部に針広混交林がある。海岸に面した民有林にもおり、国道55号線でみることもあるという。

2. 鳥帽子ヶ森(安芸郡馬路村)

鳥帽子ヶ森山(1,320m)を中心に20程度の1群がいる。ここはモミツガの天然林と、100年以上たった針広混交林である昔はここより南の通称仙谷山にもいたというが、いまは見かけないという。

3. 別府(香美郡物部村)

西に三嶺(1,893m)、東に石立山(1,708m)のある稜線の南斜面高知県側に数群いるというが、1~2群ではあるまいか、もちろん、徳島県側にも越えるものと思う。生息域がひろいので再調査の必要がある。この附近の井地山、杉熊などには、以前はいたが伐採してからいなくなったという。

4. 尻生山(長岡郡大豊町)

20~30頭の1群がいるという。

5. 奥白髪山(長岡郡本山町)

県立自然公園に指定されているところで、1群と思われる。

6. 勘定山(香美郡物部村)

いることは確かであるが、再調査の必要がある。別府の群れとは別である。

7. 大師谷山(土佐郡大川村)

早明浦ダムに流れこむ瀬戸川の北側の斜面に1群いるようである。

餌づけされていない群れを重点においた湯河原地域個体群の生態学的解明

田 中 進(マカク研究会)

箱根地域に生息する餌づけされていない群れである広河原群、須雲川群、泉群について報告する。このうち泉群は、1972年12月に餌づけ群である天照山群から分裂した群れであるが、現在群れが存在するという可能性は非常に少ないことがわかった。また、泉群が生息していた地域には、1974年秋頃より天照山群を離れた20数頭のグループが生息した可能性が強いが、これについては現在調査を継続中であり、1975年度共同利用研究の一環として報告される予定である。広河原群については、個体数の変動あるいは構成に関する新たな資料は得られなかった。遊動域については若干の変化がみられた。須雲川群については、パークウェイ群(餌づけ群)の餌づけ放棄(1974年9月15日)後の分裂による影響が強く、特に遊動域の変化がみられた。以上3群以外の餌づけされていない群れの存在に関しては、金時山周辺に1群存在する可能性が強いが、1974年には調査が十分でなかった関係上不明である。

また、餌づけ群を含めて、箱根地域の各群れ間には、個体の離脱・加入を通しての交流以外にも、群れ同士の出会い接触があることがわかった。

従前に得た資料と比較対象し、変化を明らかにする作業は、現在継続中で報告することができなかった。

オスの離脱・加入および群れ内のグルーピング現象に関する研究

福田 史夫(マカク研究会)

箱根地域に生息する近接した4群間の関係を、個体識別下にあるT群個体の離脱と加入に注目して、4群間の関係を調査した。また、同時に、年間を通じて、T群餌場に出席するグループの構成(T群の一部の個体だけよりなるグループが出席することが多い)を記録し、遊動中の群れの分岐・合流の過程をも調査した。

野生ニホンザルのグルーピング現象については、これまでの報告例は少ない。

筆者は'69年より野生ニホンザルの遊動中に生じる、群れの分岐・合流と、この間の若年オスの離脱・加入の過程の調査をおこなってきた。

野生ニホンザルにおいては、一つの群れ（周年を通じて、生活を共にする頻度が高い個体より形成される両性を含むあつまり）が遊動中、2・3のグループに分岐することが度々観察された。分岐したグループが数日間（1カ月に及ぶこともあった）個体の移出入がない安定したグループとして遊動生活をおこなっていることが観察された。特に、この場合、分岐したグループでは、性・年齢・血縁構成において、また、他群出身個体のT群への関り方について四季の変遷と共に興味ある資料が得られた。

ニホンザルの群れ構造を考察するにあたって、地域個体群内の1つの群れの中での分析は誤った結論へ導いていくように思われる。地域個体群内の近接した数群間の関係を長年月に亘って捉えてこそ、群れ生活している、ニホンザルの種の社会の実体が目に見えてくるのではないだろうか。

現在もなお、調査が継続されているので、資料は整理・分析中である。

ニホンザルの異常ヘモグロビン¹²⁾

石本 剛一（三重大・医）

電気泳動で正常ヘモグロビン(Hb)より遅い移動度をもつ異常Hbがニホンザルの地域的に限られた2つの群れ集団(伊浜、湯河原)に出現することを昭和47年度共同利用研究時に見出したので本研究でその観察を確かめるとともにより詳細な研究を行うことを目的とした。

1974年5月伊豆勝波崎野猿公園において既に捕獲中のニホンザル21例を採血し検査すると4例に前回同様の異常Hbをもつ個体を見出し血液試料を実験室にもちかえり検査に供した。

研究成果は既発表論文にまとめられているが、この異常Hbはカニクイザル変異Hbの1種Hb-p^mに類似して*in vitro*で分子重合を示す特異な性質を有すること、しかしカニクイザルの場合と異なり重合体は比較的均一で正常Hb2分子に対応する分子量を示すこと、Hb異常はβ鎖に由来しβTp10ペプチドの1アミノ酸のシステイン置換で生じたと推測されている。

現在までこの異常Hbは伊浜および近接する湯河原の

- 1) 変異部門 庄武孝義との共同研究
- 2) なお研究成果の一部は「ニホンザルの異常ヘモグロビン」日本人類遺伝学会第19回大会(1974. 11月)。人遺誌, 20 (1): 33, 1975に発表し, G. Ishimoto, M. Kuwata & T. Shotake, A Variant Hemoglobin Found in *Macaca fuscata*: Another Polymerizing Hemoglobin of Macaques. J. Anthropol. Soc. Nippon 83 (1975): in press. にまとめて報告した。

群集団のみはかなり高頻度に分布している。変異遺伝子が一部群集団のみに限って出現する現象はニホンザルについてこれまで調査された多くの多型性形質に共通して認められる傾向であるが、今後とくに関東より北方の群集団のHb変異の検索が(これまで殆んど未検査なので)望まれる。

下北半島のブナ・ヒバ林生態系¹⁾ 植生構造について

荻野 和彦(京大・農)

下北半島のブナ・ヒバ林地帯はおおむね標高400mを境として、上部にブナ林、下部にヒバ林が成立し、沢ぞいにはトチノキ、サワグルミが優占する。高木層を占める樹種によって植生型をわけると、1) ブナ型、2) ヒバ型、3) トチノキ型の3つの型の林分が認められる。

高木層にはヒバ、ブナ、カエデ類、サワグルミ、オヒョウ、コパノトネリコ、ホオノキなどが出現し、低木類にはハクウンボク、オオバクロモジ、オオカメノキ、ツリバナ、ノリウツギ、ゴンゼツ、アオハダ、ナナカマドヤマツツジ、コアジサイなどがみられる。

青森営林局はここで皆伐、択伐、漸伐などの森林施業をおこなっている。森林施業が自然植生——ニホンザルの棲息環境にどのような影響をおよぼすかを調べ、変化した植生の回復過程を追跡するため、各施業地に永久プロットを設けた。20×80m²又は40×40m²にふくまれる全立木の胸高直径(D)と樹高(H)を測定し、調査林分の位置などにはかまわず、両対数軸上におとしてみると、樹種ごとに別の曲線が描ける。D-H関係をあらわす曲線は、

$$\frac{1}{H} = \frac{A}{D^h} + B$$

であらわすことができる。定数h, A, Bのうちh, Bは高木層についてはほとんどおなじ値をとるのに対し、Aは樹種の耐陰性と関係して異なった値をとるようである。さきあげた高木層に出現する樹種のリストは、耐陰性の高いものから低いものへの順にならべてある。林分を構成する樹種それぞれの特性を、たとえば耐陰性のちがいでとらえることができれば、自然状態におけるこの地方の植生構造の動態をあきらかにしうるはずであると考える。

- 1) 86回日本林学会大会ご講演下北半島にみられるD-H関係